

後記

初めて世田谷の入野義朗氏の奥様のお宅を訪ねた日のことをよく覚えている。夜7時半から12時近くまでおじゃまし、電車もなくなりタクシーで帰ったこと。いろんな文献や資料を頂いたこと。海外の話と日本との交流の話は今まで遠い話でしかなかったものが、目の前で次々に紐解かれてさしだされた宝石のようであった。邦楽の世界では、横山勝也先生、青木鈴慕先生、沢井忠夫先生はもちろん、羽賀幹子先生、菊池梯子先生、吉村七重先生、など多くの演奏家が入野作品と出会い演奏されている。入野氏の素晴らしさは作曲されたことだけでなく、その指導や海外へ向けての発信の重要性を身をもって示し、数々の業績を結実させたことではないだろうか？作曲と後進の指導と新しい事業への着手は並々ならぬ情熱とそれに匹敵する理論がある。そこに私は惹かれ氏の残したいろいろなものに触れたいと望む。そして入野作品の研究を機に五線記譜法、序破急等について調べまともてみたいと思った。

その他にも邦楽界で御活躍なさっている作曲家はたくさんいる。砂崎知子氏が代表となっている牧野由多可氏を支援する演奏会では氏の作品のみによるプログラムで構成されており2001年から始まった。牧野氏は大合奏曲から洋楽器との曲(箏とチェロの為のモザイクやコントラバスが入りジャズの趣のある胡弓三章)、そして宮城道雄作品を独自の解釈で試みている大編成の変奏曲(春の海幻想曲・さらし風手事変奏曲・編曲砧)といった曲を生みだした。

また古典の世界では芦垣美穂先生が楽譜が発行されていない曲に取り組み、後世に伝えていく仕事をなさっている。それらの姿を間近で触れる機会を与えて頂いたことで、日々の練習とは別に、戦後諸先生方の取り組みと努力、挑戦とその情熱に触れ、私達若い世代が今しなくてはいけないこと、長期的な視野をもって学んでいかななくてはならない事をまともてみたいと思った。

10ヵ月間の短期間であったが大変有意義な日々であった。ここまでご指導を頂いた諸先生方、先輩に厚く御礼申し上げる。